

幹事会だより

1 幹事会の開催報告及び第26回定例総会の日程のお知らせ

8月11日(土)、横浜駅西口のかながわ県民センターにて平成30年度第2回幹事会を開催しました。会長、副会長1名、副代表幹事4名、幹事6名の計12名が出席し、第26回定例総会の日程・場所・講演会講師、会員拡大等について議論しました。

会員拡大等につきましては、①お住まいの市区町村・鉄道沿線等の県レベルより小さな地域のまとまり・つながりに着目した銀杏会の試行、東京銀杏会等の近隣銀杏会との行事の相乗りの促進といったアイデアが出て、実行することにいたしました。

第26回定例総会につきましては、幹事会後の調整も経て次により開催することといたしました。

会の詳細及びお申し込み方法につきましては、近々お知らせいたします。

日時：平成30年11月10日(土) 午後1時30分～午後5時45分

場所：パセラリゾーツ横浜関内3階グレースバリ横浜(横浜市中区末広町3-95)

総会 午後1時30分～午後2時

講演会 午後2時～3時30分

演題 日米関係の現状と今後の行方

講師 加藤良三氏

懇親会 午後3時45分～午後5時45分

2 東京銀杏会第32回銀杏講演会開催のご案内

このほど東京銀杏会では、下記の銀杏講演会を学士会館にて開催することになり、早速、神奈川銀杏会をはじめとした近隣銀杏会に対してもお誘いがございましたので、お知らせいたします。皆様の多数のご参加をお待ちいたしておりますとのことです。

【講演要旨】

近年、新聞等でよく目にする「デリバティブ取引」。その謎めいた取引は、一見、難解に思えて、実は意外にも身近な存在です。現代の金融取引において、デリバティブ取引は資金の運用、調達あるいはリスクヘッジの手段として、または金融商品組成における重要な部品として、必要不可欠の存在です。しかし、その他方で、巨額損失事故やリーマン・ブラザーズ倒産等の大事件を引き起こしたのもデリバティブ取引であり、そのハイリスクな面、社会に与える影響の大きさから、その在り方、リスク管理手法、監督当局による規制強化が問われています。また、商品の仕組みや価格形成のメカニズムが難解であり、顧客への説明義務や顧客側の理解度の問題がしばしば訴訟での争点となっています。そうしたデリバティブ取引の仕組み、その誕生から発展の歴史、その利便性と危険性、つまり光と影について、短時間で分かり易く解説を行い、デリバティブ取引のあるべき論、その監督や規制の在り方、今後の展望についても言及する所存です。(講師)

講師：植木雅広氏

演題：「デリバティブ取引の概要と経済活動における位置づけ」

日時：平成30年10月24日(水)

開場 18:00

講演会 18:30～19:30

懇親会(希望者のみ) 19:30～20:30

場所：学士会館302号室

〒101-8459 東京都千代田区神田錦町3-28 TEL:03-3292-5936

地下鉄 都営三田線、新宿線、東京メトロ半蔵門線 神保町駅(A9出口)徒歩1分

会費：講演会のみ参加： 会員2,000円、ご家族2,000円、非会員3,000円

講演会・懇親会両方参加：会員4,000円、ご家族4,000円、非会員5,000円

申込：10月19日(金)までに東京銀杏会事務局にEメールまたはファックスでお申し込み下さい。

(連絡先は「入会等お問合せ」でお問い合わせください。)

3 T F Tへの登録・活用の推進

このほど東京大学卒業生部門（卒業生室）からT F T登録のお願いがありました。

☆T F Tご登録のお願い☆

卒業生室では卒業生の皆様を対象に、東京大学オンラインコミュニティ「T F T」を運営しております。

「T F T」は卒業生と大学の絆をより深めるオンラインコミュニティであり、現在、約 45,000 人の方が登録されています。登録は無料で、さまざまなメンバー特典があります。

卒業生の皆様には、大学とのつながりを維持していただくとともに、大学からも最新の情報を確実にお届けできるよう、T F Tへの登録をお願いしております。会員の皆様で未加入の方には下記サイトの「T F T新規登録」からご登録くださるようお願いいたします。

その際、所属同窓会選択画面では「神奈川銀杏会」を選択、「他の卒業生への情報開示」では「所属同窓会」→「開示」を選択するようお願い申し上げます。（ご参考まで、9月10日現在で神奈川銀杏会では90名の方がT F Tに登録しておられます。）今後とも東京大学校友会をよろしくようお願い申し上げます。

卒業生室からのT F T登録のお願いは以上です。東京大学が運営するT F T（TODAI for tomorrow：東京大学オンラインコミュニティ）に登録し、卒業生検索の機能を活用して同窓生と連絡し、まずは神奈川銀杏会の同好会に誘ってみましょう。

同好会活動

(1) 三土会

昼食会（三土会）は、神奈川銀杏会の同好会活動の一環として、会員各位の知識教養を高めると共に、会員相互の親睦を深める場として開催しております。

多くの方々のご参加をお待ち申し上げます。

[開催日時]：毎月第三土曜日 11:30～14:00

・昼食をとり話題提供者のスピーチを聴いた後、意見交換・自由討論をいたします。

・当日の予定 11:30～12:30 昼食及び会員懇談

12:30～13:30 話題提供

13:30～14:00 質疑応答及び意見交換・自由討論

・テーマに依り、スケジュールを変更する場合がございます。

[開催場所]：クルーズ・クルーズ YOKOHAMA

J R横浜駅東口徒歩3分 スカイビル 27F

[今後の予定]：話題提供者の敬称省略。

H30 10月 ホームカミングデイのため休み

H30 11月 「(仮題) 企業の常識・弁護士の非常識」 大山滋郎

H30 12月 「第未定」 ゲスト 中條和子



H30 9月15日「飲兵衛科学（農芸化学）談話—酒の科学と人生—」平松茂実の1シーン
来年1月以降の話題提供者を募集しています（自薦・他薦・推薦可）

[参加申込方法] :

参加御希望の方は開催日の1週間前までに幹事宛てに申し込んで下さい。

[会費] : 3,000円-3500円/人程度(実費)。話題提供者は無料。

[幹事連絡先] :

・奥出信一郎(連絡先は「入会等お問合せ」でお問い合わせください。)

(2) 三火会

三火会開催案内(毎月第三火曜日 07:00~09:00)

【10月例会のお知らせ】

【日程】平成30年10月16日(火)

【会場】ホテル横浜キャメロット・ジャパン2階 レストラン「地中海料理スタビアーナ」

【時間】7:00~9:00頃まで

【会費】1,620円(朝食代)

【話題提供】「最近のアルゼンチン事情」天野 浩

なお、11月以降の予定は次の通りです。

【11月以降の予定】

・11月20日(火)「思いつくままに」赤石真一氏

・12月8日(火) Ocean Terrace Meeting

【連絡先】浅沼:(連絡先は「入会等お問合せ」でお問い合わせください。)

(3) ゴルフ会

会費: 年会費無料

会員: 神奈川銀杏会会員およびその配偶者の方(現在会員登録数80名)

(入会申し込み: 氏名、卒業年次・学部、オフィシャル or プライベートハンディキャップ、
〒番号、住所、Tel、Fax 番号、Eメールアドレスを幹事まで連絡ください。)

幹事: 宇田川 潔(連絡先は「入会等お問合せ」でお問い合わせください。)

(4) 食楽会

【食楽会の活動について】

暑さ寒さも彼岸までの諺通り、あの酷暑が嘘のような爽やかさが蘇る今日この頃ですが、会員の皆様におかれましては持前のグルメパワーを発揮され、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて今年4回目となる食楽会は、8/4(土)に横浜スカイビル28階にある「響」の素晴らしい眺望個室にて、久しぶりの和食を飲み放題の美酒とともに満喫いたしました。

今回は確定までに時間を要して申し訳ありませんでしたが、11/24(土)に会長肝入りの特別企画「東京競馬場特別貴賓室(ダービールーム)での競馬鑑賞とグルメ満喫の会」を開催出来る運びとなりました。会場の都合上定員20名となりますので、幹事より案内あり次第お申込をよろしくお願ひします。

またこれを機会に新規に入会を希望される方は、下記幹事までメールにて「卒業年次・学部・ご住所・電話番号(携帯電話番号共)」をご記入の上、お申込みをお願いいたします。

○大久保敏治(連絡先は「入会等お問合せ」でお問い合わせください。)

○豊吉 誠治(連絡先は「入会等お問合せ」でお問い合わせください。)

○福山 隆幸(連絡先は「入会等お問合せ」でお問い合わせください。)

(5) 気功の会

気功の会は、神奈川銀杏会の同好会活動の一環として、会員各位の健康を増進すると共に、会員相互の親睦を深める場として開催しております。

多くの方々のご参加をお待ち申し上げます。

【開催日時】: 毎月第一第三土曜日 9:30~11:00

・スケジュールを変更する場合がございます。10月は20日、27日(土)開催です。

・体を動かしやすい平服でおいでください。

【開催場所】: 神奈川区金港町1-11 ナビュール横浜タワーレジデンスの3階音楽スタジオ JR横浜駅東口徒歩3分

[主催]：東京大学同窓会・神奈川銀杏会の「気功の会」

[幹事連絡先]：幹事 奥出 信一郎（連絡先は「入会等お問合せ」でお問い合わせください。）

副幹事 福山 隆幸（連絡先は「入会等お問合せ」でお問い合わせください。）

講師 大畑 敏久

寄稿

科学的宗教論 神とは何かの(2)

若杉忠男

目次

- 1 “生命”とは何か
- 2 文化と神の誕生
- 3 科学と宗教
- 4 生命と希望
- 5 人は何のために“生きる”か
- 6 仏教の“悟り”の思想
- 7 ピンコロ願望
- 8 人生の最期をどう生きるか、介護の実際、遺言について
- 9 キリスト教の将来は

1 “生命”とは何か

神とは何だろう。ある日突然天から降りて来たのか、人間が作り育てたものなのか。神には明確な定義はないようだ。

“生命”にも科学的に明確な定義はないようだ。あるとき、無生物からなんらかの作用で生き物が動き出し、周囲のエネルギーを吸収して増殖して自己複製したのだろうか。生命とはそんなものらしい。死ぬとは変化しなくなることから生きるとは変化することだろう。

生きているか死んでいるのかわからないウイルスというものがある。物質と生命体の中間的なものである。タバコウイルスは周囲の環境が適当でないと結晶状になり、適度な気温と湿度があれば増殖してタバコの葉にタバコモザイク病という病気を起こす。一神教では神が生命を作ったと言っているが、生命の始まりは神秘的なのである。

生命体が増えすぎると地上は生き物だらけとなり、資源の奪い合い、共食いとなるだろう。それは生命の進化の過程を見れば想像がつく。草が生えると羊が増え、羊が増えると狼が食べ、狼が増えすぎると共食いの争いがおき、強いものが勝つ。人間の場合、争いの口実は、正義のためとか、平和のためとか、核兵器拡散を防ぐためとか、理由はいくらでも作られる。そしてそれらの理由は互いに影響しあって増えてゆく。

こういう人間の集まりを文化と呼ぶ。“文化は周辺からエネルギーを吸収し、仲間を増やし、成長し、自己複製して増殖してゆく”。この文化の作用から神や生命が生まれた。文化に“愛”を注ぎ込めばキリスト教の神になり、靈魂を吹き込めば“生命”になる。不思議に思う人もいるだろうが、神話の世界の出来事だから深く考えずに先へ進もう。

2 文化と神の誕生

人間が集まれば文化が生まれ、それに“愛”や“靈魂”を吹き込めば神となり生命となる。生命を得れば、生きる目標が欲しい。そして理想像として暖かい太陽や賢い動物などを神として宗教を作ることにもできる。一神教は、人間をモデルとして神を作り、人間が従うべき道徳なども作って、宗教を生み出したのだ。

一神教というからには神は一つのはずなのに、イスラム教やキリスト教などに分裂している。勝手に目的を作って自己複製をしたのであろう。

一神教では、神がまず存在して宇宙を作り、人を作ったと考えているから、次の順になる。

神→宇宙→人→宗教→・・・

神は考えられる最高の尊いものだから当然一つしかないとして、宗教とその教えとを作った。人は最高のものに恐れ多くて口出しなどできない。それで神は変化できないものになった。あとで述べるが。私は生きるとは変化することだと思っている。それなのに変化できなくなって、神は天国に閉じ込められたのである。

一方、人が神より先に存在したとすれば、人が文化を生み、文化から神が生まれたので、人も神も同じ物質世界に存在し次の順になる。

人→文化→神→宗教→・・・

現在の一神教がキリスト教やイスラム教などからなるが、これらの神は文化が作り出したもので天国に閉じ込められた神とは違い、人と同じ物質世界に存在する。

ここで生きるとはどういうことか考えてみよう。“生きる”の反対の“死”とは変化しなくなることだから、“生きるとは変化すること”であろう。生命体は変化するという本能を持つから、死を恐れるのは当然である。ただ変化するだけでは生きていくとは言えない。愛も霊魂も必要なのである。

愛を吹き込むつもりで憎しみを吹き込む場合もあるだろう。人は神と悪魔を見分けることもできない。何しろ神の定義も知らないのだから。こうして、殉教者がテロリストに変わることもあるだろう。

3 科学と宗教

文化という何かいいことのように思えるが、怒りや戦争もそして悪魔も文化の一つである。国際的なめごとが多い現在は、文化の盛んな時代である。実際、宗教は戦争や飢饉や天災など現世の不幸の鎮静剤の役割を果たしており、戦争が終わるとしばらく平和が続くということを繰り返している。そして、神は天国で死者を暖かく受け入れて下さると言われているが、一方、教えに従わない者は地獄に落とすなどとも言っている。

一神教の問題点の一つは、自然科学と合わないことである。科学では“エントロピー増大の法則”といって、この世のすべてのものは時間がたてば熱を失って冷え切って滅びると信じられている。ところが神話の神は年をとらない。この神は時間の流れの外に存在する。だから我々人間は裁判員制度の世界に存在するのに、この神はモーゼの十戒の時代に存在する。そして科学も宗教も文化の一つである。自然科学とは簡単に言えば過去の情報によって将来の予測をすることだから、過去の情報が少ない場合には将来の予測の精度は落ちる。地震の予知などのように何千年もの長期間の情報が必要な場合や、放射能の人体に与える影響の、ようにまだ十分な情報がない場合にはあまり信頼できない。

また変化（＝進化）の速度は対象によって異なるので、生物の進化のように数千年も経たないとわからないものや、景気の変動のように数か月で変化がわかるものなど、それぞれ対象によって違う。人類自身も、ホモやレズなどというような人が最近増えているようだから変化の途上にあるらしい。しかしこういう人達は目立たないように隠そうとするので正確な情報が得にくい。神という言葉も“絶対者”などと呼ばれることがあるが、明確な定義がないだけでなく、恐れ多くて質問もできず、イスラム教のように神の姿を絵にも描かせない宗教もある。

宗教の中には、豚や蛇を食べてはいけないとか、お祓いをすましたもの以外は食べないものもある。キリスト教はそういう戒律の少ない宗教だから、世界的に広まったのだろう。しかし現代の社会と一神教が生まれた時代とは大きく変化している。たとえば、今後30年以内に震度7以上の首都圏直下型地震が起きる確率が70%と言われても、家の補強工事をする人はいても、地震が来ないようにと祈る人は多分いないだろう。宗教も科学もあまり信頼されていないのである。一神教は天動説や進化論などで自然科学に負けてきた。そして、人の命は尊いという教えにもかかわらず、戦争のない世界を作ることにも成功していない。

宗教を信じる人は、自分を導いて下さる神がほしいのであろう。しかし神も科学者も将来を予言する能力はない。だから私は“この世は空で無だ”という仏教の思想や、いつかはこの世は滅ぶという科学の思想に納得している。何千年か何万年か先のことを今我々が考える必要もないだろう。一神教は今後多くの宗教に分裂し、離合集散するのではないだろうか。神も人もすべて消えてなくなるときがあると思う。生命体にとって死もまた必要なのであろうか。でもせつかく与えられた人類という生命である。できるだけ長く人類の楽しく美しい歴史を残したいと願っている。

4 生命と希望

裁判で死者に慰謝料を支払う例があるが、生命の価値はどう考えてもお金とは交換できない。最近、原発事故で移転を迫られ自殺した102歳の人に、1520万円の慰謝料支払を遺族に命じたという。金額の根拠もそのお金を受け取る権利のある人はだれかも私には納得できない。

また、世の中には、安らぎを得るためにどうしても自殺したい人もいる。戦場で爆発に会い、耳も聞こえず目も見えず、両手両足も失い、声も出せなくなった通信兵が、身振りでもールス信号を使って「死なせてくれ」と報せていたという恐ろしい話がある。そういう不幸な人のために天国の神は必要だと思う。天国で神様が待っていて下さるとか、いい薬が開発される見込みだからもう少しがんばれと言ったらどうだろう。人間はたとえ嘘だとわかっているとしても希望があれば、耐えられると思う。“希望”には“神”に近い力があるようだ。

5 人は何のために“生きる”のか

人はなぜ生きるのだろうか。一神教では神を喜ばせるのが信者の喜びだと言う。科学者は、偶然に生まれ何十万年か何百億年年かの時間をかけて進化して、目的もなく、ただ生きているのが楽しいから生きているのだと考えているようだ。それでいいのかも知れないが、人間ならば何かもっともらしい理由が欲しい。

一神教では神が人間を作ったのだとして、神から恵まれたのだから命を粗末にはしてはならないと言う。一方、殉教して死んだ人は聖者としてたたえる。しかし殉教者は被害者から見ればテロリストだから、それをたたえるのは不自然である。そう考えると、この世には明確な善悪の区別や生きる目的はないようだ。

仏教では、“諸行無常”とあって、すべてのものや現象は水の流れるように変化し続けると考え、善悪の基準も人生の目標もなく、人間にまかされている。それが自由勝手によいと思うか、人間として責任が重いと感じるか、人によって違うだろう。

この世で、一神教信者はしっかりした岩（神のこと）にしがみつこうと考え、仏教徒は流されるものどうし互いに手をつなぎ助け合って生きようとする。生命体は仲間どうし支え合い助け合わなければならない。ときには他の生き物の肉を食べて生き抜く必要もある。そのときは「(命を) いただきます」と許しを乞うのである。人間はいま最強の生命体であるが、目に見えないような病原菌に負けて、寿命は百年ていどが限界である。生命体は命を譲りあっているのであろうか。

人は最強の生命体と考えられているが、姿の見えないような微生物に侵されて死ぬこともある。生命の譲り合いの一端を担っているのであろう。そう考えれば、命を粗末にはできない。生命体として、その中の最高の地位を得た幸運を感謝し、その責任を感じるべきである。犬や猫の目には、人間は神のように見えるはずである。

6 仏教の“悟り”の思想

仏教の考えは、一神教より自然科学になじみやすい。仏教の“悟り”の境地とはどのようなものか、一神教と比較してその違いを説明しよう。しかし仏教にも各種の宗派があり、また私は一神教についてもよく知っていると言えない。私の不完全な知識による説明であることをご容赦願いたい。

① 仏教では、人はその命を超自然的な神などから与えられたものではないと考える。

② 諸行無常（一切の事物も現象も一定の状態にはない）として、この世には生きる目的も善悪のルールもない。そういうものが欲しければ自己責任で作らなければならない。

また、人は、

③ 自利利他（自分は他人に施すことによって悟りを得て、他人はその施しによって助けられる）として、神ではなく人間どうしで支え合っている。他人を介護することは、まわりまわって自分が介護されることにつながる。

④ 死については、命は無から生じた無に帰るのだから、すべての欲望を捨て、諦め、許し、譲りあうことが必要である。

7 ピンコロ願望

一神教では、神は理想で天国は理想だったが、いまの日本人で神の存在を信じている人はそう多くないと思う。人の命は神から与えられた尊いもので、だれもが死にたくないはずだと一般の人は考えるだろうが、高齢者は少し違うようだ。そして死の直前まで元気にピンピンして長患いせずニコリと死ぬという“ピンコロ願望”が人気がある。死そのものの恐怖よりも、死にともなう痛みや苦しさなどを気にしているようだ。生きていればその行動に責任が伴うように、死ぬにも責任がある。昔の武士は命より名誉を重んじ、自分個人より祖先からの血統の存続を願ったようだ。自爆テロのような、後はどうでもかまわないというような死にはすべきではないが、科学的に言えば、生物は最期は死ぬのが自然であり、いつまでも生きていては地球上が込み合って困る。高齢になって働けなくなったら死んで子孫に道を譲るのは義務であろう。ある地方では、教師が死んだ場合、「教師が死んだ」と言わず、「教師を生きた」と言うそうである。人間は将来を変えたり予測したりはできないが、過去の記憶は自分のもので、昨日の自分と今日の自分は、生まれてから死ぬまで時空を超えて繋がっているとみなされる。過去に自分が借りたお金は現在の自分が返さなければならない。同じように、すべての生命体は遠い親戚として繋がっているという考もある。羊も狼も、キリスト教も仏教も、アメリカ人も韓国人もである。

8 人生の最後をどう生きるか、遺言について、介護について

自殺はしてはいけない。我々が人類の一員として生きられるのは確率的には滅多にない幸運で奇跡と言ってもよい。その恵まれた幸運を自ら絶つなどというのは生命体の本能にも反し、日本の法律にも犯罪とされ、遺産の価値は下がり、遺族は子孫の結婚にも差し支えるというような事態にもなる。

しかし高齢者は、精神的にも体力的にも経済的にも厳しい状況に追い込まれ、長生きしても幸せではないなどとため息が出ることもある。

私の妻はキリスト教の洗礼を受けており、ほぼ毎日曜日、近所の親切な方に教会に連れられて教会に行っているが、私より10歳ほど若いのに最近では体調不良で大きな声も出ない。一方私は耳が遠くなって妻の声がよく聞こえない。妻は「どうすればよいのかわからない」などと言っている。私は「そのうち神様がなんとかして下さるよ。希望を持って明るくがんばろう」としか言えない。そういう私も、ボケ気味である。これも与えられたくれた恵みだろう。最近、いろいろ介護施設や人材や制度が整ってきているので、感謝している。

今は超高齢化社会である。人生の現役を退いてから死ぬまでにも人生があるのに、身体が思うように動かない。どう生きればよいか、私の今後の人生に与えられた課題かとも思う。今、杖を2本使ってなるべく早く歩き、ぎごちない笑みを浮かべ、介護施設に通う車の中で下手な歌を歌ったり冗談を言ったりしている。微笑みは絶やさないように心がけている。

実際に介護をうけるようになって、介護者は暖かい心の人だというのが実感である。しかし高齢者には生きるだけでも辛いときがある。辛い、痛い、苦しい、退屈だ・などである。自分勝手な悩みだと思われるかだろうが、超高齢化社会を迎え、他人の役に立たないということは生きづらい。だからたいていの高齢者は鬱状態になると思う。その辛さは介護する人にもわかるはずで、いくら心を込めて親切にしてあげても、苦しみを長引かすだけで、どうせもう永くはないだろうと思えば、暖かい優しい気持ちも空しい。

介護の仕方にも進歩は感じられる。介護される人の人格を尊重し、ちゃんと目を見て話さないとか、なるべくボケ老人扱いしないように、自力で歩かせなさいと言う。テレビで見たが高齢者が手を引かれて2、3歩ほど歩いたら介護している人が涙ぐんでいた。一年ぶりに歩いたのだそうである。人生の最期が近いと思ったら、子孫に活躍の場を譲り、自分の子孫は自分よりしっかりしていると信頼して自分の死後は任せるとよい。葬儀については、習慣によっていろいろあり、自分の亡き後ことなど言い残しても、その通りになる保証はない。そして、自分の愚かな行為は許しを乞い、介護してくれた人々から受けた好意を感謝し、お礼はすぐ言うべきである。後で言えばいいとか、言わなくてもわかるだろうとか思ってはならない。後はいつ来るかわからないのだから。

後に残す言葉としては、広く地球環境を考えた思いやりと助け合いの必要なことを言っておきたい。そうしなければ、人類は意外に早く絶滅するのではないだろうか。人類がいなくなったら神もその役目を失うから、人類の築き上げたこの文化と共に消滅するだろう。人も文化も神も、共に少しでも長く続くようにと祈りたい。

9 キリスト教の将来は

世の中は日々変化しているので、キリスト教も変化すべきであろう。自然科学には天動説や進化論で敗北し、生命の尊さを訴えながら戦争のない世界を作ることにも成功していない。政治や科学の問題は、それぞれの専門家にまかせあまり口出ししない方がよいと思う。神は心の安らぎを与えてくれている。これは人類に必要な重要な役割である。

人類は増加し続けている。このまま増え続ければ、資源不足になるだろう。産児制限、堕胎、安楽死なども必要になるだろう。人類は進歩発展の時代から、譲り合い、助け合い、我慢の時代を迎えていると思う。それらの問題に最も抵抗しているのは、一部の保守的な一神教の人で、宗教は紛争の火種にしているように思える。

そして変化は身近まで押し寄せている。最近LGBT（ホモ、レズ、など）の増加しているようで、我々自身が変化しているらしい。歴史とは篩い分けの作業で、何百年かのちには、こういう人達が多数派になるかもしれない。

キリスト教の神は一神教と言っているが、“三位一体”で三人からなる複合体らしい。人も右脳左脳などからなる複合体で、周囲の状況によって変わる。赤ん坊を見ればにこにこし、異性の前では気取ったりする。神も人も周囲の影響を受けるのだ。これは悪いことではない。

人は教会で神の心の中の自分に気に入った部分を見て、気に入った説教しか聞かないと思う。教会で、あの人が洗礼を受けたから自分も受けようという人が多い。気の合った仲間が自然に集まる。死ぬのは誰でも怖い。気の合った人が集まってグループを作り説教を聞く。一緒に天国に行くのだから仲良しどうしがよい。死ぬのは怖い、「赤信号みんなで渡れば怖くない」である。信者も司祭も、いや生命を持つものは全て心が通じ合うらしい。特に人が作った神が人と同じ心を持っているらしいことを喜ぶべきである。人と神は心が通じ合うのである。

次回の神奈川銀杏会ニュース第55号は12月編集、1月1日発行の予定です。